



ソフトウェア工学の ベストプラクティス

Capers Jones 著
富野 壽・岩尾 俊二 監修
水野 哲博・吉田 善亮 監訳

ISBN : 978-4-320-09760-5

共立出版

菊判・672頁

定価 9,135円 (税込)

2012年7月刊

2049年頃におけるソフトウェア開発と保守の状況とその展望

まず、統計値や実践的なソフトウェア工学の研究に裏付けされた全9章・672ページに圧倒される。どの章からでも読み始めることができる。ベストプラクティスの全容を把握したければ第1章から、その一つひとつに関心があれば第2章から、ソフトウェア・ライフサイクルの各プロセスにおけるベストプラクティスに関心があれば、第4章以降からが良いであろう。

原本の発行は2010年であり、第3章の内容は著作時から40年後を展望した仮説である。時間が経過すれば可能になるというのではなく、展望する諸事項に関連する研究・試行・実践というものが今後もなされなければ成立し得ないものである。

・開発が芸術から工学に基づくものに転換

- ・要求獲得のために、ユーザはインタビュー以外の方法を受ける
- ・インテリジェントエージェントの実用化でエキスパートのアドバイスのにより開発が進行
- ・特許により保護された再利用のためのコンポーネント及び設計手法の活用により、アプリケーション機能の85%が再利用可能なコンポーネントからなる
- ・再利用のために、既存のコードから設計情報等の抽出が可能
- ・生産性は、2009年では10-15FP/月で、2049年には45-50FP/月に向上
- ・欠陥除去率は、2009年では87%、2049年では98%に向上
- ・開発に100%再利用可能コンポーネントが用いられた場合、生産性は100FP/月、欠陥除去率は99%に向上 (新谷 勝利)



リーン・スタートアップ

エリック・リース 著
井口 耕二 訳
伊藤 譲一 解説

ISBN : 978-4-8222-4897-0

日経 BP 社刊

四六判・408頁

定価 1,890円 (税込)

2012年4月刊

日本企業が今すぐに取り組むべきプロセス

日本経済が元気のない状況において、本書で紹介する方式は非常に有効と考える。とくに日本企業が得意としてきた生産方式をベースとしている点で親近感と興味がわく。

リーンスタートアップは、リーン生産方式を参考に構築された方式である。ソフトウェア開発では、アジャイル開発として近年注目を集め、国内でも実践事例が紹介されるようになってきている。起業だけでなく、製品やサービスの開発も対象になる。ベンチャ企業だけでなく、大企業での製品やサービス開発も対象になる。

具体的には、会議室の中で繰り返しられる調査・分析の議論に時間をかけるのではなく、現地・現物が基本となる。アイデアの製品化、顧客の反応を見て学び・判断する。これを小さく早く回すことが求められるのだ。

この本を読んでいて、10年ほど前に聞いた楽天株式会社の本木谷浩史氏の発言を思い出した。「楽天が成功できたのは、インターネット上で市場を展開していることであり、間違えていたらすぐに作り直して対応できた」。製品化と学び・判断を早くまわした結果と言えるだろう。

組込み製品を含め、全てのシステムがインターネット接続される時代。この恩恵を活用した開発が求められる。

また、日本企業が得意としてきた改善による品質の作り込み。これにより改善が繰り返され、ユーザが求める、もしくは求める以上の品質を実現してきた。これからは、品質の定義・範囲を広げ、利用者が求める、もしくは求める以上の製品やサービスを提供することを実現したい。

(渡辺 登)